三重県埋蔵文化財調査報告２１９

有　滝　道　遺　跡

―伊勢市村松町所在―

２００１年3月

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県伊勢市は古来より伊勢神宮の鎮座する地として栄えてきました。また伊勢市の海岸部においては神宮の外港であった大湊を中心に多くの港が存在したことが推定されており、これらの港を担ったであろう人々の営みを思わせる遺跡も多数存在します。

今回、その伊勢市の海岸部において道路の改良工事に伴う発掘調査が実施されました。ここに報告致します有滝道遺跡ではこの地域を担ったであろう人々の営みを示す遺構・遺物が見つかり、またそこからわかる多くの新しい発見もありました。

今回発掘調査致しましたのはほんの一部分であり、まだまだ不明な点も多くありますが、この部分的な発掘調査の成果も貴重な資料であり、当地の歴史解明の一助となる、と確信しております。

発掘調査にあたっては、地元伊勢市在住の方々、村松町会、村松土地改良区をはじめ、伊勢市教育委員会、県土整備部道路整備課、南勢志摩県民局伊勢建設部から多大なご協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある御対応に、心からの御礼を申し上げます。

２００１年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　　藤　澤　英　三

例　言

1　本書は、三重県伊勢市村松町字有滝道・藤治垣内に所在する有滝道遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、平成12年度主要地方道伊勢松阪線県単道路改良事業に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。

3　発掘調査と報告書作成業務は平成12年度に行った。発掘調査は三重県埋蔵文化財センター調査第一課が行い、調査第一課主査兼調査第二係長野原宏司の調整のもと、技師伊藤裕偉、技術補助員小林俊之が担当した。

4　調査にかかる費用は、執行委任を受けて三重県県土整備部が全額負担している。

5　当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び資料普及グループが行った。遺構写真は伊藤が、遺物写真は小濵学が撮影した。報文の執筆は伊藤・小林が適宜分担して行い、文末・目次などに明記した。全体の編集は、野原の調整のもと、伊藤・小林が行った。

6　調査にあたっては、伊勢市在住の各位、村松町区、伊勢市教育委員会、および県土整備部道路整備課・南勢志摩県民局伊勢建設部から多大な協力を受けたことを明記する。

7　当地は国土座標第Ⅵ系に属する。挿図の方位は全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏6°30′（平成9年)、真北方位は西偏0°17′34″である。

8　挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

9　当報告書での用語は、以下の通り統一した。

つき……「坏」があるが、「杯」を用いた。

10　当報告書での遺構は、通番となっている。また、番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けた。

ＳＤ‥‥溝　ＳＫ‥‥土坑　ＳＺ‥‥落ち込みなど　pit ‥‥ピット、柱穴

11　本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

12　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　言……伊藤‥（1）

Ⅱ　位置と環境……小林‥（4）

Ⅲ　調査の成果～層位と遺構～……小林‥（9）

Ⅳ　調査の成果～出土遺物～……小林‥（12）

Ⅴ　調査のまとめ……伊藤‥（15）

挿　図　目　次

fig.1　事業地内調査区位置図

fig.2　周辺遺跡位置図

fig.3　調査区周辺旧地形復元図

fig.4　調査区南壁土層断面図

fig.5　遺構平面図

fig.6　出土遺物実測図

表　目　次

tab.1　出土遺物観察表

図　版　目　次

PL.1　調査区と遺構

PL.2　調査区土層・出土遺物

Ⅰ　前　言

1　調査の契機

a　調査地の道路事情

三重県の海岸線は、河川から排出される土砂が伊勢湾の潮流・沿岸流などによって再堆積した砂堆（浜堤帯・砂州）や、それに取り囲まれた潟湖（ラグーン）によって形成され、古来美しい景観をなしていた。現在でこそ潟湖はほぼ埋没し、海岸線には堤防が築かれているが、周囲よりも安定した砂堆には累々と集落が形成され続けており、かなりの想像力が必要なものの、往時の景観を思い浮かべることもあながち不可能ではない。

この砂堆は、伊勢湾に流れ込む河川規模やその間隔が、当然ながら一定ではないため、場所毎で幅や長さも異なり、いくつかの地点では不連続となっている。今回の調査対象となった県道伊勢松阪線のうち有滝道遺跡が所在する地点は、伊勢市村松町地内南東部の砂堆上にあたり、そこから南東方向へは、かつてのラグーンと河川（江川）を経て、同市有滝町南西部の低位段丘へとつながっている。この部分は、村松町南東部の砂堆と有滝町の低位段丘とが最も接近した場所であることから、この道が砂堆とラグーンが明確に機能していた段階から機能していたことが容易に推察できる。

このような、往時の自然地形に対応した道は、現在でもなお三重県下各地に存在しており、自然環境に対して適切に対応していたかつての人々が偲ばれるが、自動車交通の発達した現在では歩行者・運転者いずれもが危険を伴う状態となっている場所がいくつかある。今回発掘調査の対象となった有滝道遺跡が所在する地点についても、北浜小学校への通学路であるにもかかわらず道路幅員は狭隘で、事故を誘発し易い環境であった。

b　調査への経緯

この道路改良事業が三重県埋蔵文化財センターへと報告されたのは平成元年度で、その段階で当地が周知の埋蔵文化財包蔵地である有滝道遺跡（市遺跡番号146）であり、事業地内の一部についてはまずは試掘調査が必要な旨報告した。その後、いくつかの要因が重なり、実際に試掘調査を行ったのは平成８年度である。平成９年３月６日に、当センター技師西村美幸・研修員林義巳を担当者として試掘調査を実施した。その結果、事業地内550㎡については本調査が必要と判断された。この結果を基に当センターおよび文化芸術課（当時、現在は生涯学習課文化財保護室）では、県土木部（当時、現在は県土整備部）と埋蔵文化財保護協議を重ね、平成12年度に事業地内の発掘調査を行うことで合意した。

2　調査の経過

a　調査経過概要

発掘調査は、平成12年6月12日から開始し、同年7月14日に現地作業を全て完了した。

調査にあたっては、村松町在住の各位をはじめ、村松町会、村松区土地改良区には大変おせわになりました。また、調査区近隣の方々には、交通の便などでご不自由をおかけした。それにもかかわらず、有形無形のご理解いただいたことに対しては、心からの御礼を申し上げたい。

また、発掘調査作業員の各氏には大変お世話になりました。ここに御芳名を記し、心からの御礼を申し上げます。

小牧大吉郎、竹内五男、竹内譲、辻井由生、中村修三、中村博義、中村正道、浜口和弘、浜口熊男、濱口富彦、堀内清夫、宮山更生、山口一弥、山中一幸、山中基司

b　調査日誌（抄）

６月15日　重機による掘削を開始。全体に希薄。

６月16日　重機掘削続行。地区杭設定。

６月21日　人力掘削作業開始。須恵器片出土するも、遺物は全体に少ない。

6月23日　SD11の掘削。須恵器器台出土。これは実測できる。
7月4日　清掃と写真撮影。
7月5日　遺構の実測
7月6日　土層図作成のための断ち割り。人力掘削作業と調査終了。
7月14日　撤収。伊勢建設部へ現場引き渡し。

c　文化財保護法等にかかる諸通知

当遺跡発掘調査にかかる関係法令の諸通知は、以下により行っている。

・三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長あて）
平成12年5月10日付け道整第75号（県知事通知）
・文化財保護法第58条の2第1項（文化庁長官あて）
平成12年3月28日付け教生第1711号（県教育長通知）
・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（伊勢警察署長あて）
平成12年9月25日付け教生第229-7号（県教育長通知）

3　調査の方法

a　土工部門委託について

当センターでは、調査の迅速な対応と調査員の調査そのものへの専念のための労務管理軽減を主な目的とする土工部門委託を行っている。当遺跡の調査では、（財）三重県農業開発公社と当センターとで契約締結のうえ実施した。

今回の調査では、上記公社主幹折戸信之氏が当遺跡の担当として、当センターの担当である伊藤・小林とともに作業にあたった。

b　掘削について

掘削については、表土および大規模な撹乱坑について重機掘削し、遺構を人力掘削した。また、調査終了時に行った埋土状況確認のための断ち割りは、重機掘削による。

c　地区設定について

調査区内は、4m四方の升目で切ることによって小地区（グリット）を設定している。西から数字、北からアルファベットを付け、升目の北西隅の交点をその小地区の符号とした。

なお、ここで設定した小地区方眼は、国土座標軸とは無関係である。

d　遺構図面について

調査区の平面図は、全体を1/50で手書き実測した。土層断面図は1/20で手書き実測している。今回は、竪穴住居・土坑・溝などで良好な遺物出土状況を伴うような遺構が存在しなかったため、1/10の個別実測図は作成していない。

これらの実測図における国土座標については、周囲にある三角点・水準点を利用している。

（伊藤裕偉）

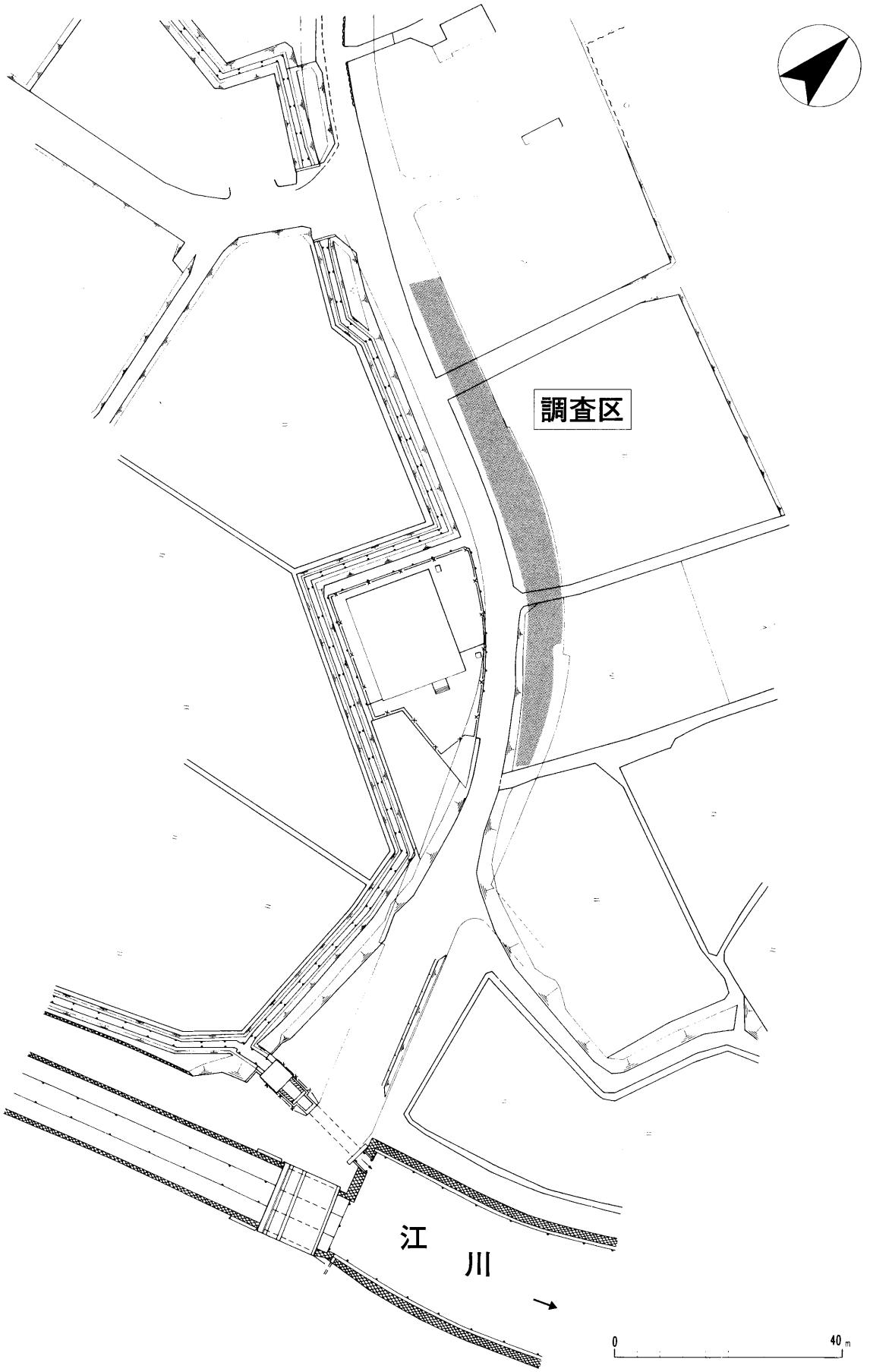


fig.1　事業地内調査区位置図　　（1 ： 1,000）

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

有滝道遺跡(1)は、伊勢市村松町字有滝道・藤治垣外に所在する。本遺跡のすぐ東側には江川・外城田川・宮川の３本の河川が流れており、これらの河口部分にある本遺跡はそれらの旧流路で形成された砂洲・砂堆の微高地上にある。本遺跡付近にはかつて小規模な砂堆と潟湖が３条あったと考えられ、調査区は海側から３条目の砂堆上に位置する。この砂堆は復元上では、現有滝集落と同等の規模であり、当遺跡にも時代は限定せずとも海に関わるであろう集落の存在が十分考えられる地形である[①]。実際、当遺跡近辺の砂堆上では二本松Ａ遺跡(3)・二本松Ｂ遺跡(4)があり、これらにも地形上港の性格を持つ遺跡の可能性がある。また当遺跡にほぼ隣接する高ノ御前遺跡(6)では平成８(1996)年度に発掘調査が行なわれており、6～7世紀の土器が大量に出土して注目された[②]。

当地周辺の村松・有滝・大淀には現在でも漁港があり、町の様子も漁村としての雰囲気が漂う。また宮川対岸部には伊勢神宮の港として中世に大きく発展した大湊が存在し、そこからの影響を避けられない状況であったことは想像に難くない。このような「海」との関係が予想される中、当遺跡周辺はどのように変遷してきたのかを次節で概述する。

2　歴史的環境

旧石器時代の遺跡としては、ママ田遺跡(11)が知られる。皇學館大學の岡田登教授の表採資料により明らかになったもので、その際の石器が数点紹介されている[③]。

縄文時代の遺跡としては、大藪遺跡(12)がある。この遺跡は、国道23号線南勢バイパス建設に伴い発掘調査が行われており、当該時期の遺構は確認されなかったが、早期の押型文や晩期の条痕文の土器が出土している[④]。また現有滝漁港の西には荘司端遺跡(13)があり、ここからも縄文時代後期の土器が表採されている。

弥生時代には、数ヵ所で活発な活動が見られるが、いわゆる「拠点集落」と呼べ得る遺跡は今のところない。前述の大藪遺跡ではいわゆる遠賀川式の土器が確認され、縄文晩期から集落が継続していたようである。また、遠賀川式土器の出土は三雲町中ノ庄遺跡が有名だが、中ノ庄遺跡と大藪遺跡が弥生文化伝播ルートの地点として、さらにここを経て鳥羽市おばたけ遺跡へのルートが想定されている。ほかに、大藪遺跡からは後期の方形周溝墓３基を確認している[⑤]。他にも中楽山遺跡(14)・野垣内遺跡(15)でも方形周溝墓が確認されている。この２遺跡はまこも遺跡(16)・中楽山南遺跡(17)と遺跡としては同一と見られ、この一帯に後期の集落が確認されている。

古墳時代になると、弥生時代後期に大きく発展した宮川左岸部に古墳時代前期にひきつづき活発な活動が見られる。しかし集落遺跡に比して、この地域での前期古墳の存在は確認されていない。集落としては小杜遺跡(18)・中楽山遺跡・野垣内遺跡などが見られる。特に小杜遺跡は石釧が表採されており、前期古墳の存在が考えられている[⑥]。また高ノ御前遺跡でも前期の集落が想定されている。中期になると、これらの前期の集落の活動は止み、衰退したようである。後期になると、古墳の分布からまた活動を確認できるようになる。有滝道遺跡周辺では、丁塚古墳(19)があり、別名経塚古墳とも言う。これについては経筒の出土が知られており、平安時代の経塚であることが確認されている。この古墳は、昭和50(1975)年皇學館大學考古学研究会による測量調査では径29mの円墳とされているが、岩中淳之氏は地籍図や小字名より水濠をもった前方後円墳である、としている[⑦]。埋葬施設に関しては、かつて天井石と考えられる石があったことや墳丘の高い点から横穴式石室であったことが推定されている。またこの付近にはかつて多くの古墳が所在したようである。岩中氏がこれらの古墳についての分布の復元を行っており、中塚古墳・中塚東古墳・中塚南古墳・カンジョ塚古墳・

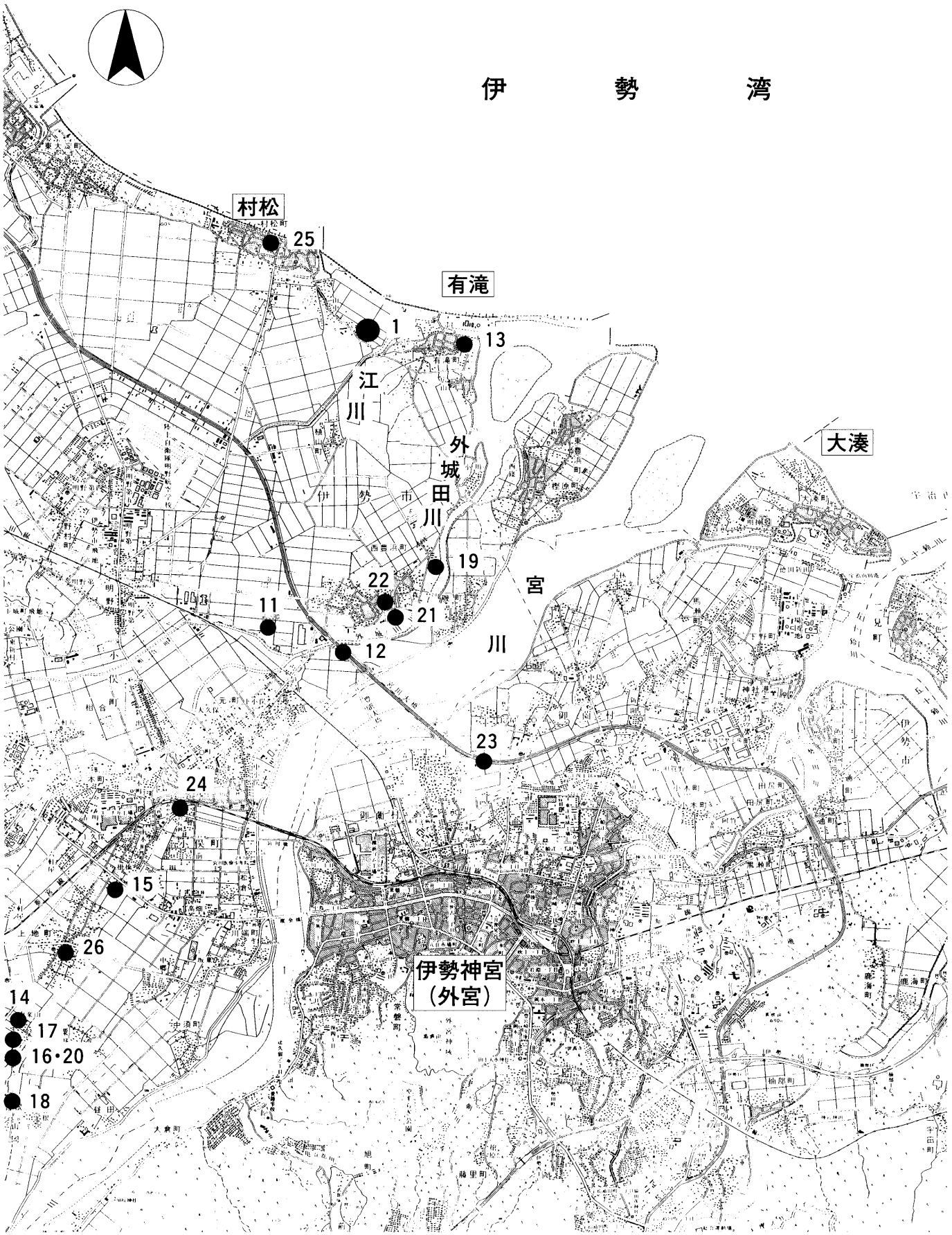


fig.2　周辺遺跡位置図（1：50,000）　〔国土地理院「明野」「伊勢」「二見」「鳥羽」1：25,000より作成〕

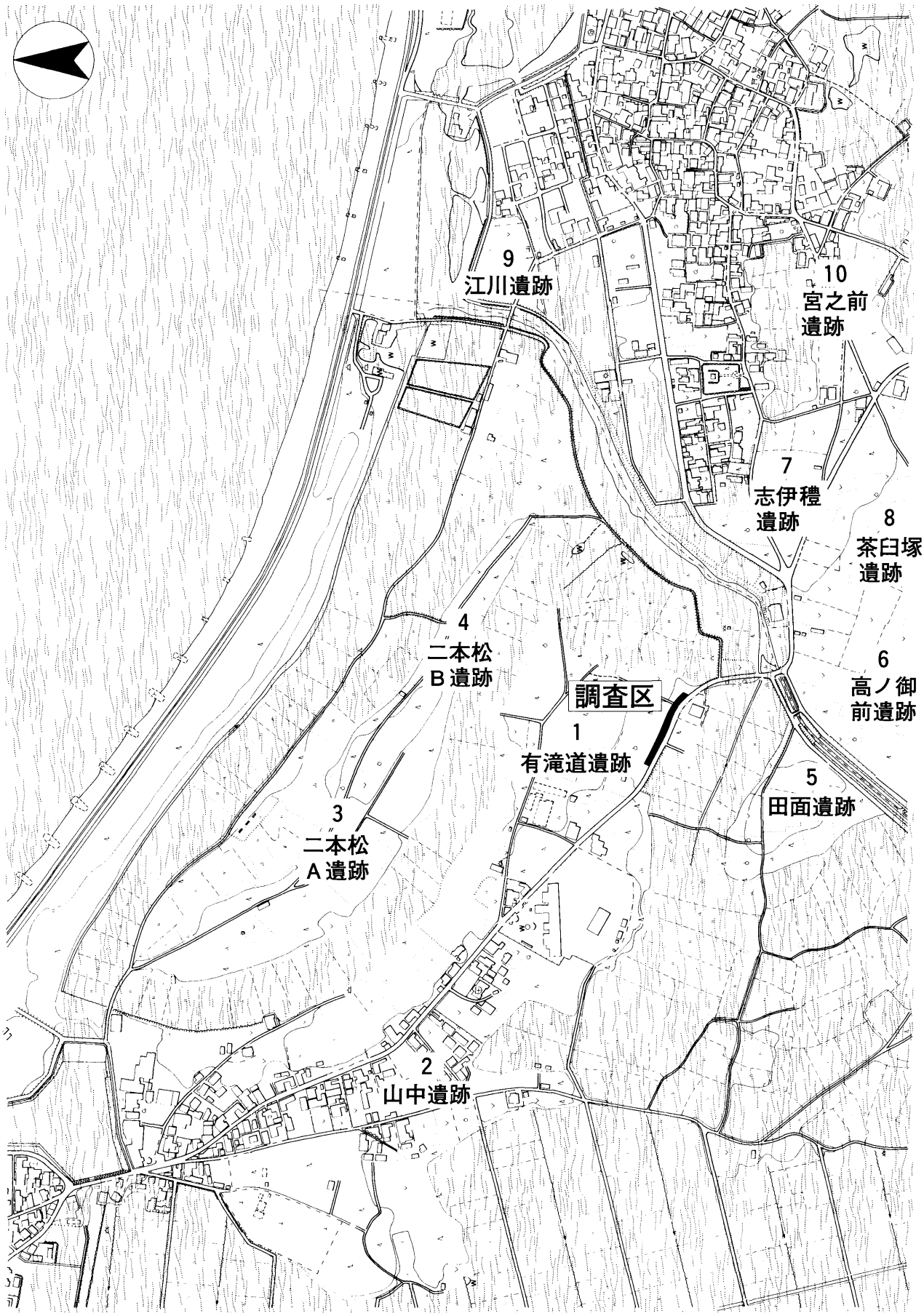


fig.3　調査区周辺旧地形復元図〔トーンはかつて海又は川であったことを示す〕　（1：6,000）

野依東古墳・下稲葉古墳・万城古墳の7基の古墳の存在を推定している[8]。またこの地には他にまこも古墳群⑳の存在が知られる。

奈良時代や平安時代には、小御堂前遺跡㉑・殿垣外遺跡㉒が知られる。この2遺跡は同一遺跡と見られており、昭和54(1979)年から翌年にかけて発掘調査が行われ、多量の緑釉陶器の出土や平安時代の廂を持つ掘立柱建物が検出されていることから、調査担当者の岩中氏は『太神宮諸雑事記』治暦二(1066)年八月一七日条記載の伊勢神宮祭主が居住したとされる「伊蘇館」である、と推定している。さらにこの報文中で岩中氏は、丁塚古墳に埋納された経塚のことについても触れ、伊勢市内の経塚は宮川以東の内宮・外宮の周辺地に限られることから特異性を示し、さらに丁塚古墳の経塚は、この伊蘇館に居住した神宮祭主によるものである、としている[9]。

この時期、高ノ御前遺跡では、前述の通り6～7世紀の土器が大量に出土しており、当遺跡に隣接することから有滝道遺跡への影響が最も大きい遺跡と言える[10]。

宮川対岸部には高向遺跡㉓がある。高山寺本『和名抄』記載の「度會郡多可无 古郷」に比定される地で、昭和46～48（1971～1973）年に行なわれた発掘調査では、奈良時代から室町時代に至る集落が確認された。中でも高向B・C遺跡では、緑釉陶器や石帯・帯金具の出土から、旧高向郷における官衙的性格を持つ遺跡とされている。また遺構においても一定の方位に柱列を揃えた掘立柱建物が確認されており、一般集落とは異なる性格を示している[11]。
また斎王の離宮として知られる国史跡の離宮院跡㉔も造営されるようになり、一時期ここが斎宮として機能した時期もある。また、昭和54(1979)年と平成10(1998)年には発掘調査も行われており、その成果として字名や字切図・都市計画図の比較から斎宮跡と同様の方格地割の存在が考えられるようになり、それらを基に離宮院跡の範囲も従来より広い範囲が推定されるようになっている[12]。

中世になるとこの地域は、伊勢神宮の御厨・御薗として多くの地名が史料上に登場する。村松や有滝もその中に登場し、『神鳳鈔』には「村松御薗」「有滝御薗」として、『外宮神領目録』には「村松御厨」「有滝御厨」としてその存在が確認できる[13]。この御厨・御薗は港の存在を背景にして成立した可能性が高いと考えられ、これらのことから村松や有滝は中世のいずれかの段階では既に港が機能しており、また港町としての体裁も整えていたのではないか、と考えられる。伊藤裕偉氏が旧地形を基に伊勢湾西岸部の主要な港の中世の港町の範囲の復元を行なった際には、村松や有滝は各々現集落にほぼ重なるという復元をしており、中世の港町の存在を想定している[14]。

またこの時期になると宮川対岸に所在する大湊が自治都市として発展してくることが、豊田武氏らによって説かれている[15]。村松や有滝の港もこの大湊の発展による影響を多分に受けていたものと考えられるが、史料的に確認できるものはなく、詳細は不明である。

中世の遺跡としては、鎌倉時代には前代より続く遺跡がほとんどで、特にこの時期に目立ってくる遺跡はない。ただこの地域の御厨・御薗の存在が神鳳鈔成立段階で既に確認でき、またこの時期の神宮の興隆から見て当地域にも何かしらの影響を想定しても不自然ではなく、現在確認されていない遺跡が存在する可能性がある。

現に村松に所在する宇気比神社には、三重県指定文化財になっている鎌倉時代から室町時代に至る間の大般若経599帖、経櫃6、帙箱60が所蔵されている。経本は建暦2（1212）年に書写されたものが大部分で、経櫃と経帙箱にはその多くに貞治4～6（1365～1367）年の銘があり、「村松御厨松林寺」と記されていることから、これらは松林寺のものであったと思われる。松林寺は明治初年に廃仏毀釈により廃寺となった寺だが、地元の伝承ではこれらの経類は松林寺に寄進されたものであるらしい[16]。これらの松林寺関係史料より村松集落のこの時期の存在が想定される。

また村松に関しては、伊勢神道で有名な外宮禰宜の度会家行が「村松長官」と呼ばれており、村松にその居宅があったとされる。この居宅とは現在の村松氏館跡㉕とされている。村松氏館跡は現村松神社境内がそれにあたるとされるが、遺構は全壊で詳細は不明である[17]ものの、村松の中世を考える際の重要

な遺跡である。

また、この他にこの近辺の中世城館跡には寺山城跡㉖がある。寺山城跡は、一部が破壊されているものの土塁・空堀が認められる[18]。

近世には、有滝は山田奉行支配の幕府直轄の天領で、江戸時代初期には山田奉行所管轄の船倉が設置されていた。寛文８（1668）年には山田奉行花房志摩守幸次の居宅が置かれ、その地には現在「殿屋敷」の字名が残る。また年不詳だが、江戸中期のものと考えられる絵図には有滝と三州吉田（現愛知県豊橋市）とを結ぶ航路が描かれており、当地が漁港としてだけでなく交易港としても機能していたことが考えられる[19]。

一方村松に関しては、近世には鳥羽藩領になっており、港として機能していたことが書かれた文書はなく、その実態については不明である。有滝が天領であるのに対し村松は鳥羽藩領であることから、幕府にとって重視すべきは有滝であり、当然その背景には港の存在に依る所が大きいと考えられ、近世には有滝がかなり大きな港であったとされよう。そして当遺跡はその字名が示すように、この有滝と村松を結ぶ陸のルートとしての役割を持っていた可能性が考えられよう。

（小林俊之）

註

① 伊藤裕偉「伊勢湾西岸部における中世港町の状況」『ふびと』50号、三重大学歴史研究会、1998年。
また、本書fig.３を参照のこと。

② 『三重県埋蔵文化財センター年報』８、三重県埋蔵文化財センター、1997年。
東浩成「高ノ御前遺跡とその遺物」『歩跡』４号、1989年。

③ 皇學館大學考古学研究会『小俣町の遺跡』、1985年。

④ 古水康夫「大藪遺跡」『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告』、三重県文化財連盟、1973年。

⑤ 前掲④文献。
谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』、三重県文化財連盟、1972年。

⑥ 村山邦彦「小杜遺跡」『歩跡』２号、皇學館大學考古学研究会、1972年。

⑦ 岩中淳之「伊勢市丁塚古墳と周辺消滅古墳の再検討」『三重考古学研究』１、1985年。

⑧ 前掲⑦文献。

⑨ 岩中淳之『殿垣外遺跡発掘調査報告』、伊勢市教育委員会、1982年。

⑩ 前掲②文献。

⑪ 伊藤久嗣「高向Ａ遺跡」「高向Ｂ遺跡」「高向Ｃ遺跡」『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告』、三重県文化財連盟、1973年。

⑫ 御村精治・榎本義譲ら『離宮院跡発掘調査報告』、小俣町教育委員会、1980年。
小濱学・成瀬匡章『離宮院跡（法楽町地区）発掘調査報告』、小俣町教育委員会、2000年。

⑬ 「神鳳鈔」『群書類従』、第一輯。
「外宮神領目録」『続々群書類従』第一、国書刊行会。

⑭ 前掲①文献。

⑮ 豊田武『中世日本商業史の研究』、岩波書店、1952年。
網野善彦『無縁、公界、楽』、平凡社、1978年。など

⑯ 下中邦彦編『三重県の地名』、平凡社、1983年。

⑰ 『三重の中世城館』、三重県教育委員会、1976年。

⑱ 前掲⑰文献。

⑲ 前掲⑯文献。

参考文献

- 岩中淳之編『三重県伊勢市遺跡分布地図』、伊勢市教育委員会、1981年。
- 下中邦彦編『三重県の地名』、平凡社、1983年。
- 皇學館大學考古学研究会『伊勢市とその周辺の弥生文化』、1991年。
- 皇學館大學考古学研究会『伊勢市とその周辺の古墳文化』、1992年。
- 岩中淳之「伊勢市域の弥生遺跡―宮川下流域の弥生文化の様相―」、地方協議会編『三重―その歴史と交流―』、雄山閣出版、1989年。

Ⅲ　調査の成果～層位と遺構～

1　基本層序

今回の調査区は海岸まで500mの地点にある。

第Ⅱ章でも述べたように３本の河川の河口部分にあたり、それらの旧流路によって形成された砂洲・砂堆上にある。そのため、最下層は粗砂層である。

基本層序は、表土を0.2mほど除去すると、黄褐色の砂層が表れる。その黄褐色の砂層の下に最下層の粗砂層がある。試掘調査では、この黄褐色の砂層にあたると思われる黄褐色砂質土の上に遺構が認められたため、この面を検出面とし、調査を行なった。しかし、調査区の東側はこれに限らず、黄褐色の砂層が認められなかった。そのためさらにその下層にあたるオリーブ褐色の砂層を検出面とした。

表土の下にもいくつかの土坑状のものが認められるが、ビニール袋やジュースの空き瓶や空き缶が出土しており、ごく最近のものである。この土坑は深く入るものが多く、検出面でも多く確認されたが、地山を掘り込んでいることから掘削はしなかった。

また黄褐色の砂層の下層である粗砂層は、西から東へと傾斜する砂層がいくつもの重なりで堆積し、当地を形成した旧流路が東へと流れを変えていったことがわかる。さらに地山面での平面検出時には、南西から北東方向にかけて粗砂の差異による分層が可能で、この砂層の傾斜が南から北へ向かっていることが確認できた。この旧流路は現在の江川につながるものと考えられ、fig.3で見たような旧流路の状況が層位として確認できた。

2　遺構の概要

今回の調査で確認された遺構は、溝が５条とその他数個の土坑に過ぎない。ここでは今回の遺構の概要について触れることとする。

SD11は、今回の調査で最も目に付く遺構であり、遺物も１番多くの量が出土した遺構である。調査区のほぼ中央で東西方向に確認できたもので、幅は約２m、深さ約0.6mあり、検出した長さは約37mある。埋土の上層では、ガラス瓶やビニール袋を含んでいたが、下層では江戸時代後期の焙烙が出土しており[①]、この頃からこの遺構は機能していたのだろうと考えられる。字界を示した溝であった可能性が高い。

調査区の東側には土坑群が存在する。いずれも良好な遺物に恵まれておらず、正確な時期は不明である。ただ少量の出土した破片資料やその埋土の状況からさほど古いものではなく、SD11とほぼ同時期と考えてよいだろう。

SD11以外にも溝状遺構がいくつか見られ、SD14・SD16がそれにあたる。いずれも南北方向に伸びるものであり、SD11とは直行する方向である。深さではSD11に劣るものの幅約２mはSD11とほぼ同規模であり、時期・機能的にもSD11と同様に字界を示すものであった可能性が高い。

この他の遺構としては、SZ1が挙げられる。SZ1は調査区最東部に位置する落ち込み状遺構で、ここより東側は大きく落ち込んでいたようである。コンクリート等の出土が見られ、ごく最近に埋め立てられたようであるが、この落ち込みは江川に続くものと見られ、江戸時代後期には既に形成されていたようである。

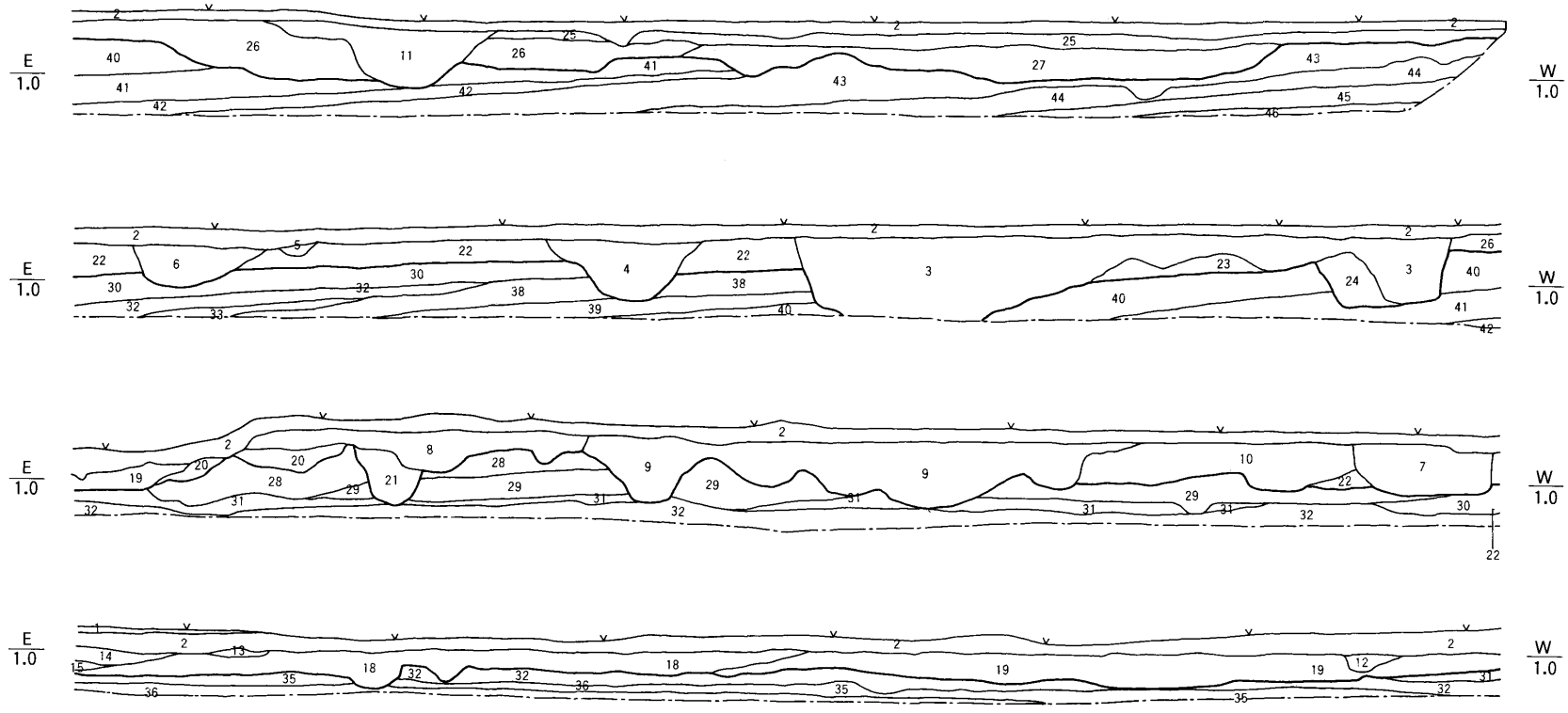
遺構の主なものとしては以上である。全体的に目立つ遺構はなく、遺物の出土も少ないことから詳細な時期に関しても不明なものが多い。下層調査も行なったが、検出面より0.5mほど掘り下げたところで、出土遺物もなく粗砂の層が続いたまま湧水が激しくなったため、掘削を中断し、調査を終了した。

（小林俊之）

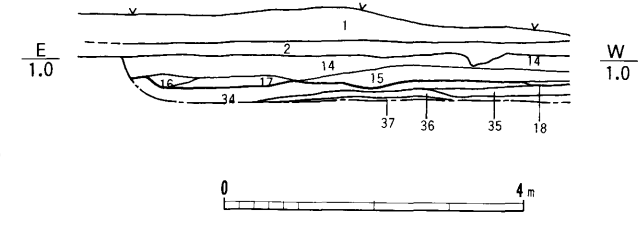
註

① 伊藤裕偉『嶋抜Ⅱ』、三重県埋蔵文化財センター、2000年。
本堂弘之『六大B遺跡（A地区）発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター、1999年。

fig.4　調査区南壁土層断面図



1　客土
2　表土　黒褐色砂質土　2.5YR3/1
3　攪乱
4　攪乱
5　攪乱
6　攪乱
7　攪乱
8　攪乱
9　攪乱
10　攪乱
11　暗黄色細砂（灰色粘土含む、鉄分沈着）2.5Y6/4
12　暗オリーブ褐色粗砂　2.5Y3/3
13　オリーブ褐色粗砂　2.5Y4/3
14　暗灰黄色砂（10～40㎜の礫多）2.5Y4/2
15　暗オリーブ褐色砂　2.5Y3/3
16　暗灰黄色砂　2.5Y4/2
17　黄灰色細砂　2.5Y6/1
18　オリーブ褐色砂　2.5Y4/3
19　黄褐色砂・粗砂の互層　2.5Y5/6
20　オリーブ褐色粗砂　2.5Y4/3
21　オリーブ褐色粗砂　2.5Y4/4
22　明黄褐色粗砂　2.5Y6/6
23　明黄褐色砂（10～20㎜の礫混）
24　暗黄色細砂　2.5Y6/4
25　淡黄褐色細砂（10～20㎜の礫混）2.5Y4/3
26　明黄褐色細砂（礫少量）　2.5Y6/6
27　黄褐色細砂（礫少量）　2.5Y5/6
28　黄褐色砂　2.5Y5/6
29　明黄褐色細砂・粗砂の互層　2.5Y6/6
30　黄褐色細砂・粗砂の互層　2.5Y5/6
31　黄褐色粗砂　2.5Y5/6
32　明黄褐色粗砂　2.5Y6/8
33　黄褐色砂　2.5Y5/6
34　暗オリーブ褐色細砂（礫まじり）2.5Y3/3
35　灰色砂　10Y6/1
36　灰色細砂　10Y6/1
37　黄褐色粗砂　2.5Y5/4
38　黄褐色砂・粗砂の互層　2.5Y5/4
39　明黄褐色砂・10～60㎜の礫の互層　2.5Y6/6
40　黄褐色砂・粗砂の互層　2.5Y5/6
41　黄褐色砂・10～50㎜の礫の互層　2.5Y5/3
42　黄褐色砂（10～40㎜の礫多）2.5Y5/3
43　黄褐色粗砂（10～70㎜の礫多）2.5Y6/8
44　黄褐色砂　2.5Y6/8
45　灰黄色粗砂（10～50㎜の礫多）2.5Y6/2
46　灰黄色細砂（礫まじり）　2.5Y6/1



（1：100）

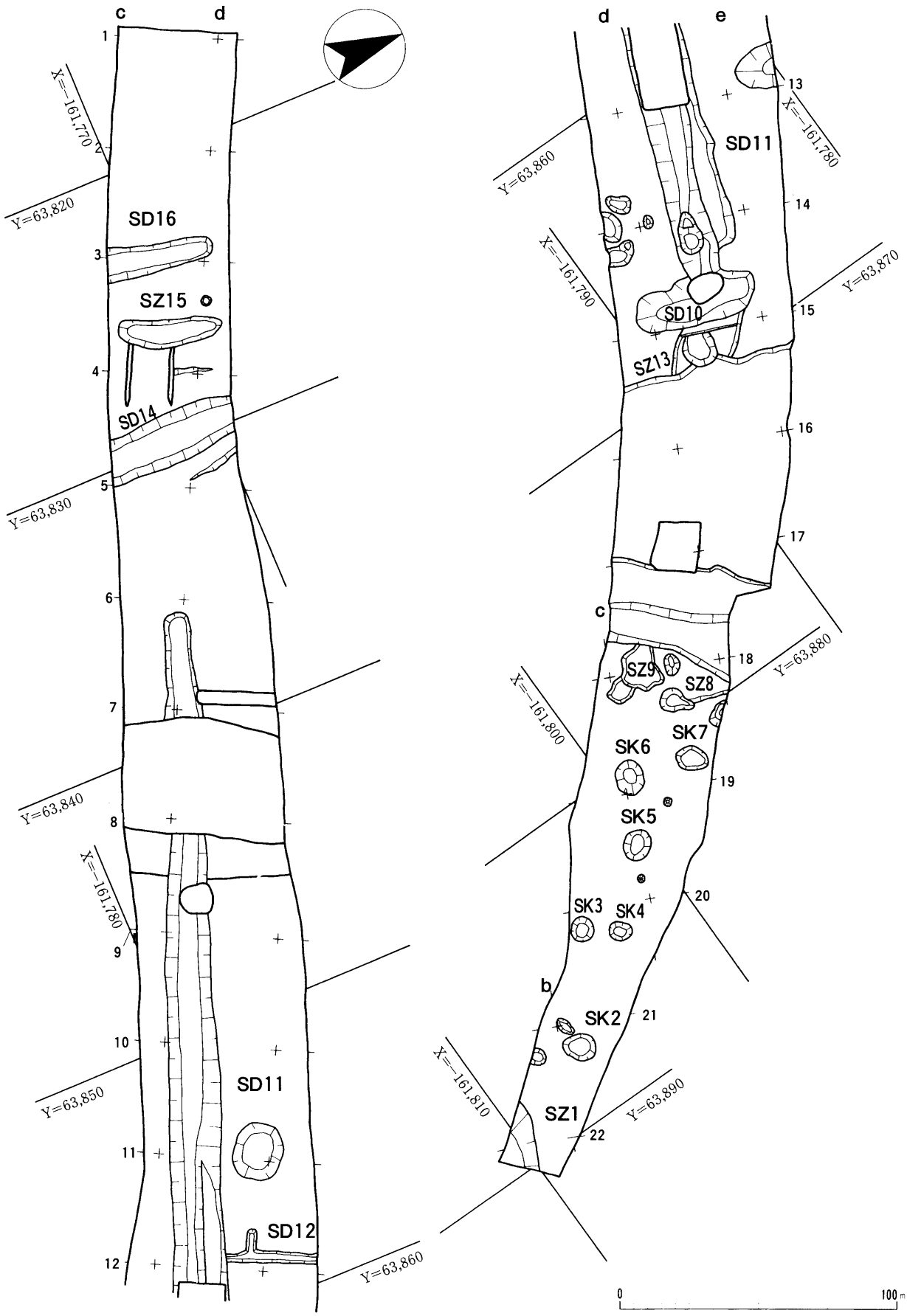

c
d
e
b
SD16
SZ15
SD14
SD11
SD12
SD10
SZ13
SZ9
SZ8
SK7
SK6
SK5
SK3
SK4
SK2
SZ1
X=−161,770
X=−161,780
X=−161,790
X=−161,800
X=−161,810
Y=63,820
Y=63,830
Y=63,840
Y=63,850
Y=63,860
Y=63,870
Y=63,880
Y=63,890
0
100m
(1 : 200)

fig.5　遺構平面図

Ⅳ　調査の成果～出土遺物～

今回の調査で出土した遺物は、遺物整理箱（パン用の箱に相当）２箱分に過ぎない。遺物には直接遺構の年代決定の資料とならないものが多いため、単純に遺物の時期順に見ていくこととする。なお、出土遺構や層位に関してはtab.1の遺物観察表を参照されたい。

1　古墳時代（1～13）

1～8は須恵器である。杯蓋のほか高杯や器台が見られる。9～13は土師器である。9は高杯の脚部だが、それ以外は台杯甕である。

2　奈良時代（14～19）

14、15に関しては器種不明であるが、それ以外は土師器の甕である。いずれも口縁部の小片で、いずれもかなり磨滅が激しい。

3　室町時代（20～21）

いずれも南伊勢系の土師器で、20は鍋の口縁部、21は茶釜の口縁部である。いずれも第4段階のもので、16世紀代のものである[①]。

4　江戸時代以降とその他（22～38）

22は土師器の焙烙で、SD11出土の遺物である。体部外面にはスス、体部内面には炭化物の付着が見られ、江戸時代後期のものである[②]。

23は常滑産の陶器で墨書が見られるのだが、何と書いてあるかは不明である。おそらく「□三」と書かれていると思われる。人名であろうか。２文字目の「三」に関しては、さんずいへんである可能性もある。24にも墨書が見られる。おそらく１文字であるが、文字の中央部分が欠けていることもあり書かれている内容は不明である。

25は瓦質土器の鉢で、底部から高台部分にあたる。体部下方の外面には花のスタンプ文が見られる。焼成が甘く、橙色を呈する。

26は染付の皿で、おそらく伊万里産のものである[③]。27は磁器椀である。桃色地に大手菓子企業不二家のマスコットぺこちゃんが描かれている。絵の左には「ぺこちゃん」と銘がある。不二家発表のぺこちゃん編年[④]やその他地元の人の話により、昭和40年代に使用されていたもののようである。

29、30はいわゆる加工円板である。それぞれ土師器鍋、常滑産甕を再利用したものであり、ともに研磨痕はない。30に関しては加工円板として使用後、さらに割れたものである。また土師器鍋の加工円板は非常に薄く、円板の用途としてこの薄さでも十分であったことがわかり、加工円板の機能を考察する上での資料となろう。

31～38は土錘である。31～35までが土師質のもので、36～38までが陶器質のものである。現地の住人の話によると、土師質、陶器質共に現在使用しているものと変わらないということであった。

5　周辺部表採遺物（39～44）

39は1998（平成10）年頃、有滝町に所在する本覚寺付近の工事中に出土したものであるらしい。古式土師器の壺の底部である、と考えられる。

40～44は調査区の北500mの位置に所在する海岸にて採集した遺物である。40は白磁椀である。海岸にあったために、かなり磨滅が激しい。大宰府編年の白磁Ⅳ類に相当する[⑤]。41～44は、土錘であるが、現在漁に使われている網のためのものである。ややススのついたものも見られるが、これは網ごと焼却した際についたものであろう。31～35に示した土錘とほぼ同じ形態であり、前述の付近住人の話のとおりである。長期に渡り形状を変えることなく使用され続けていることがわかる。

（小林俊之）

註

① 伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と甕そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会、1996年。

② 伊藤裕偉『嶋抜Ⅱ』、三重県埋蔵文化財センター、2000年。本堂弘之『六大B遺跡（A地区）発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター、1999年。

③ 永竹威・矢部良明『日本陶磁大系19　伊万里』、平凡社、1989年。など

④ 中日新聞2000年8月31日付朝刊の不二家の広告を参考とした。

⑤ 山本信夫「土器の分類」『大宰府条坊跡』Ⅱ、太宰府市教育委員会、1985年。

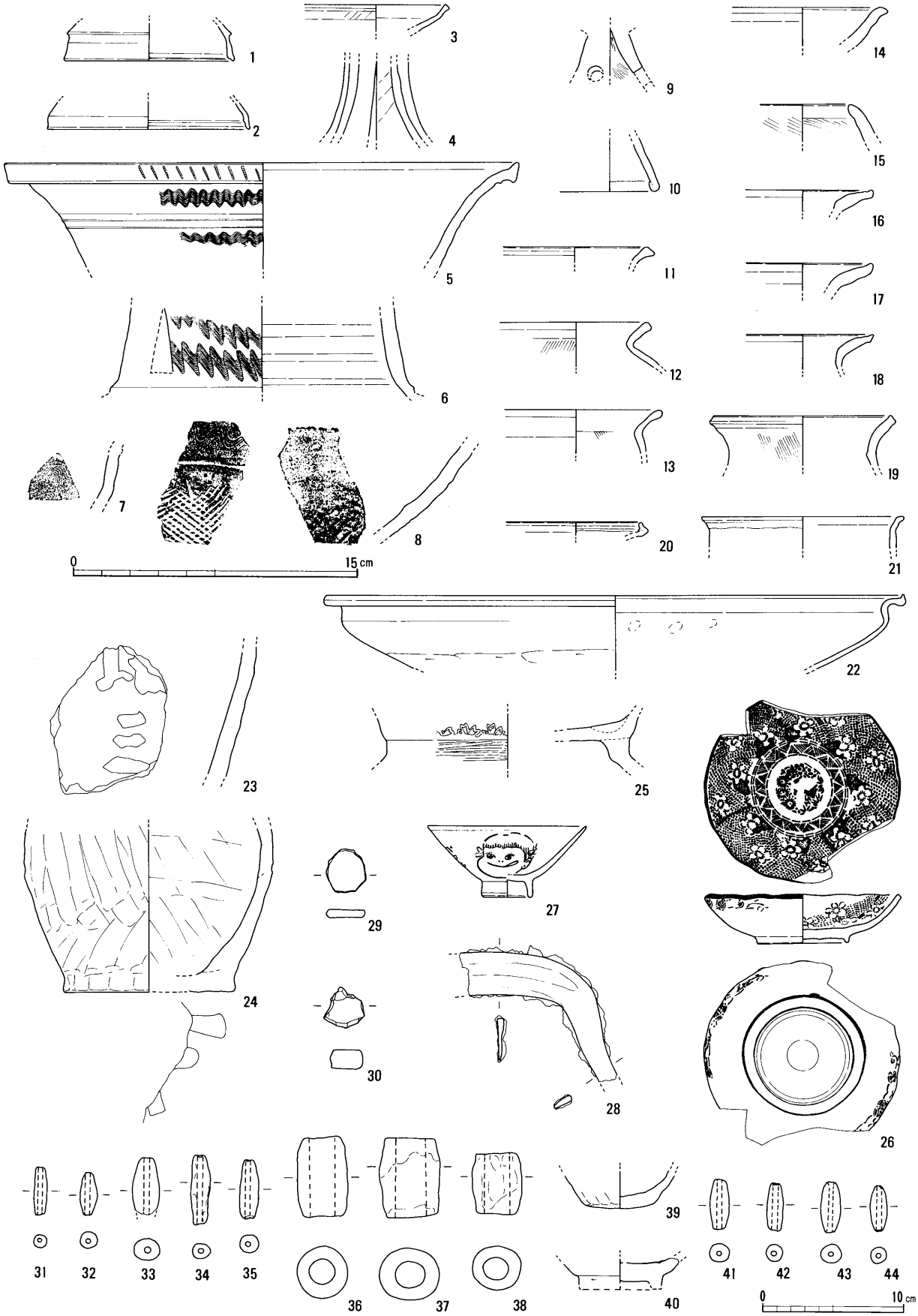


fig.6　出土遺物実測図　　（７・８は１：３、それ以外は１：４）

番号	実測番号	器　種　等	地区	遺構・層名等	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	色　　調	残存	特記事項
1	505	須恵器　杯蓋		表採	口縁12.0	ロクロナデ	やや密	(外) 灰白 (内) 灰白	小片	
2	504	須恵器　杯蓋	d17	SZ8	口縁14.0	ロクロナデ	やや密	(外) 灰N6/ (内) 灰N6/	小片	
3	302	須恵器　器形不明	d15	SZ13	口径不明	ロクロナデ	粗	灰　N4/	口縁小片	
4	602	須恵器　高杯	c2	検出中	不明	ロクロナデ、スカシ3方？	密	(外) 灰　5Y6/1 (内) 灰　N5/	脚部小片	
5	501	須恵器　器台	e14	検出中	口縁36.0	ロクロナデ→波状文、口縁に刺突文	やや密	(外) 灰　N5/ (内) 灰黄2.5Y7/2	口縁1/14	
6	202	須恵器　器台	d14	SD11	不明	ロクロナデ→波状文、スカシあり	密	灰　5Y5/1	台部1/10	
7	503	須恵器　壺？	c3	検出中	不明	ロクロナデ→波状文	やや密	(外) 灰　N5/ (内) 灰　10Y6/1	小片	
8	502	須恵器　器台		表採	不明	ロクロナデ→波状文、沈線、タタキ、内面青海波	やや密	(外) 暗灰　N3 (内) 灰　10Y6/1	小片	
9	606	土師器　高杯	a21	包含層	不明	スカシ3方	やや粗	にぶい橙　7.5YR6/4	脚部1/2	
10	305	土師器　台付甕	c18	SZ8	不明	ナデ	粗	にぶい黄橙　10YR7/4	脚部小片	
11	204	土師器　台付甕	試掘	№8	不明	口縁ヨコナデ	粗	にぶい黄橙　10YR7/4	口縁小片	
12	303	土師器　台付甕？	d13	SD11	不明	ヨコナデ→ハケ	粗	橙　7.5YR6/6	口縁小片	
13	304	土師器　甕？	c18	SZ8	不明	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	粗	橙　5YR6/6	口縁小片	
14	203	土師器　椀？	d15	SZ13	不明	口縁ヨコナデ、体部ナデ	粗	にぶい黄橙　10YR7/4	口縁小片	
15	701	土師器　器種不明	c18	包含層	不明	口縁ヨコナデ、 体部内外面ハケ	やや密	(外) 灰黄　2.5Y6/2,7/2 (内) 浅黄橙　10YR8/3	小片	
16	704	土師器　甕	d14	検出中	不明	口縁ヨコナデ	やや密	橙　7.5YR7/6	小片	
17	703	土師器　甕	d5	検出中	不明	口縁ヨコナデ、 口縁内側にややハケ残る	やや密	浅黄　2.5Y7/3	小片	
18	702	土師器　甕	b18	下層	不明	口縁ヨコナデ	やや密	にぶい橙　7.5YR7/4	小片	
19	604	土師器　甕	c8	検出中	口縁12.0	口縁ヨコナデ、体部ハケ	やや粗	にぶい黄橙　10YR7/4	口縁1/6	
20	205	土師器　鍋	a22	SZ1	不明	口縁ヨコナデ	やや粗	にぶい褐　7.5YR6/3	口縁小片	スス付着
21	206	土師器　茶釜	b21	SK2	口縁14.0	口縁ヨコナデ	やや密	浅黄橙　7.5YR8/4	口縁小片	
22	201	土師器　焙烙	d11	SD11	口縁41.0	口縁ヨコナデ、 体部ナデ・オサエ	やや粗	にぶい黄橙　10YR7/4	口縁1/6	外面スス付着、内面炭化物付着
23	103	陶器　器形不明	d11	SD11	不明	ナデ、オサエ	粗	橙　5YR6/6		常滑産、墨書あり
24	601	陶器　甕？	試掘	№4	底径5.9	外面ナデ、オサエ、 内面工具ナデ	粗	灰黄　2.5Y6/2 灰褐　5YR6/2	底部約1/2	底に墨書あり
25	104	瓦質土器　鉢	d14	SD11	不明	ヨコナデ→スタンプ文、 高台にミガキ	粗	にぶい褐　7.5YR5/4		焼成軟
26	101	磁器　皿	d4	SD14	口縁13.8		密	(胎) 灰白　N8/	口縁2/3、 高台完存	
27	102	磁器　椀	d14	SD11	口縁11.0	外面に「べこちゃん」	密	(胎) 白　9/	口縁1/4、 高台1/3	「べこちゃん」の銘あり
28	301	鉄製品　鎌	d13	SD11						サビ激
29	706	加工円板	c16	包含層	直径3.0	研磨なし	やや密	黒褐　10YR3/2、 橙　5YR6/6	ほぼ完存	加工前は土師器鍋か？
30	705	加工円板	d1	検出中	直径不明	研磨なし	やや密	褐灰　7.5YR5/1、 橙　2.5YR6/6	約2/3	加工前は常滑産陶器甕
31	708	土錘	d15	暗褐色土	長さ3.3		やや密	灰黄　2.5Y6/2、 灰　N4/	完存	土師質
32	709	土錘		表採	長さ3.0		やや密	にぶい赤褐　5YR5/4	完存	土師質
33	405	土錘	d15	SZ13	長さ4.1	ナデ	やや密	橙　5YR7/8	ほぼ完存	土師質
34	404	土錘	c18	SZ8		ナデ	やや粗	にぶい橙　10YR7/4	完存	土師質
35	707	土錘		表採	長さ4.1		やや密	にぶい橙　7.5YR6/4	ほぼ完存	土師質
36	401	土錘	d14	SD11	長さ5.7	ナデ	粗	にぶい橙　5YR6/4	ほぼ完存	陶器質
37	402	土錘	c6	SD11	長さ5.7	ナデ	粗	(釉) 黒褐　5YR3/1 (胎) にぶい橙　5Y6/1	完存	陶器質
38	403	土錘	d14	SD11	長さ4.4	ナデ、オサエ	粗	灰　5Y6/1	ほぼ完存	陶器質
39	605	土師器　壺	有滝町	本覚寺付近工事中	底径4.7		やや粗	にぶい橙　7.5YR6/4	底部完存のみ	
40	603	白磁　椀	村松海岸	表採	高台径5.6		密	(釉) 灰白　5GY8/1 (胎) 白	底部約1/2	陶器質
41	711	土錘	村松海岸	表採	長さ3.5		やや密	にぶい黄橙　10YR6/3	完存	土師質
42	712	土錘	村松海岸	表採	長さ3.3		やや密	にぶい黄橙　10YR7/2、 にぶい赤褐　5YR4/4	完存	土師質
43	710	土錘	村松海岸	表採	長さ3.5		やや密	にぶい橙　7.5YR7/3、 にぶい黄橙　10YR7/2	完存	土師質
44	713	土錘	村松海岸	表採	長さ3.2		やや密	にぶい橙　7.5YR6/4	完存	土師質

tab.1　遺物観察表

Ⅴ　調査のまとめ

今回の発掘調査地区内は、遺構・出土遺物ともに極めて少ない。有滝道遺跡の全体像を把握することはできなかったが、少ないながらも得られたデータから考えられることを二・三触れ、まとめとする。

1　村松地内の地形環境

第Ⅰ章で触れたように、有滝道遺跡は砂堆上に立地する遺跡である。有滝道遺跡の乗る砂堆（以下、「有滝道砂堆」と仮称）と現在の海岸線を形成している砂堆との間には、二本松遺跡が乗る砂堆（以下、「二本松砂堆」と仮称）がある。つまり、有滝道砂堆は、現状では海岸線から３条目の砂堆に見える。有滝道遺跡の南東方向には、高ノ御前遺跡が乗る低位段丘面があり、有滝道砂堆はこの地に形成された最初の砂堆と考えてよい。

有滝道砂堆は、その北西方向に位置する現在の村松町中心集落が乗る砂堆（以下、「村松砂堆」と仮称）と本来は連続すると考えられる。しかし、村松砂堆は海岸に面した砂堆であり、現状では海岸から３条目である有滝道砂堆とは異なる。これは、有滝道砂堆が河川の流路によって影響を受けていることを示すと考えられる。

fig.３に示したとおり、有滝道砂堆と二本松砂堆との間には旧河道と見られる水田部がある。この形状からは、現状では江川の旧流路と考えてよい。さらに細かく観察すると、この旧流路は幅が一定で、湾曲している。この形状からは、有滝道砂堆の海岸側が、ある時期の波打ち際とは考えにくい。おそらくは、村松砂堆・有滝道砂堆・二本松砂堆は、もともとは１条の砂堆で、それが江川の流路が現在の位置に移行した段階で、有滝道砂堆と二本松砂堆は分断されたものと考えられる。

さて、今回の調査区では、fig.4の土層図に示したように、砂層が西から東へ傾斜していることが確認できた。それを平面的に見ると、調査区地区杭の東西軸に対し、約30°北偏して縞状に観察できた。このことから、調査区内の砂層は北西方向から供給されて堆積していることを示している。したがって、今回の調査区は江川の旧流路から供給された土砂によって形成されたものと考えることができよう。

2　有滝道遺跡と周辺遺跡について

今回の調査区内からは、古墳時代の土器が出土している。このうち、古墳時代前期の土器は全体に摩滅が激しく、周辺遺跡からの流れ込みである可能性が高い。今回報告したように、有滝町地内からは古墳時代前期頃の土師器が出土しており、近隣低地部に当該時期の遺跡が存在すると考えられる。

古墳時代後期の須恵器類は、田辺昭三氏による陶邑編年のTK208型式～TK23型式頃に併行するものである[①]。摩滅も少なく、調査区近隣に当該時期の遺構が存在する可能性は極めて高い。

注目できるのは、器台が含まれていることである。有滝道遺跡のように砂堆上に展開する当該時期の遺跡には中ノ庄遺跡[②]や小野江甚目古墳群[③]のように、古墳群が見られる傾向がある。須恵器器台が集落跡から出土する例は少ないことからも、有滝道遺跡内には古墳が存在する可能性が高いと考える。

また、村松海岸では、大宰府分類によるⅣ類[④]と考えられる白磁を採集している。村松から有滝にかけての地域が良好な港湾機能を有することからも、当地には中世前期までは遡る中世集落が存在しており、そしてそれは、現状集落の地下に今でも眠っていると考えられる[⑤]。　（伊藤裕偉）

註

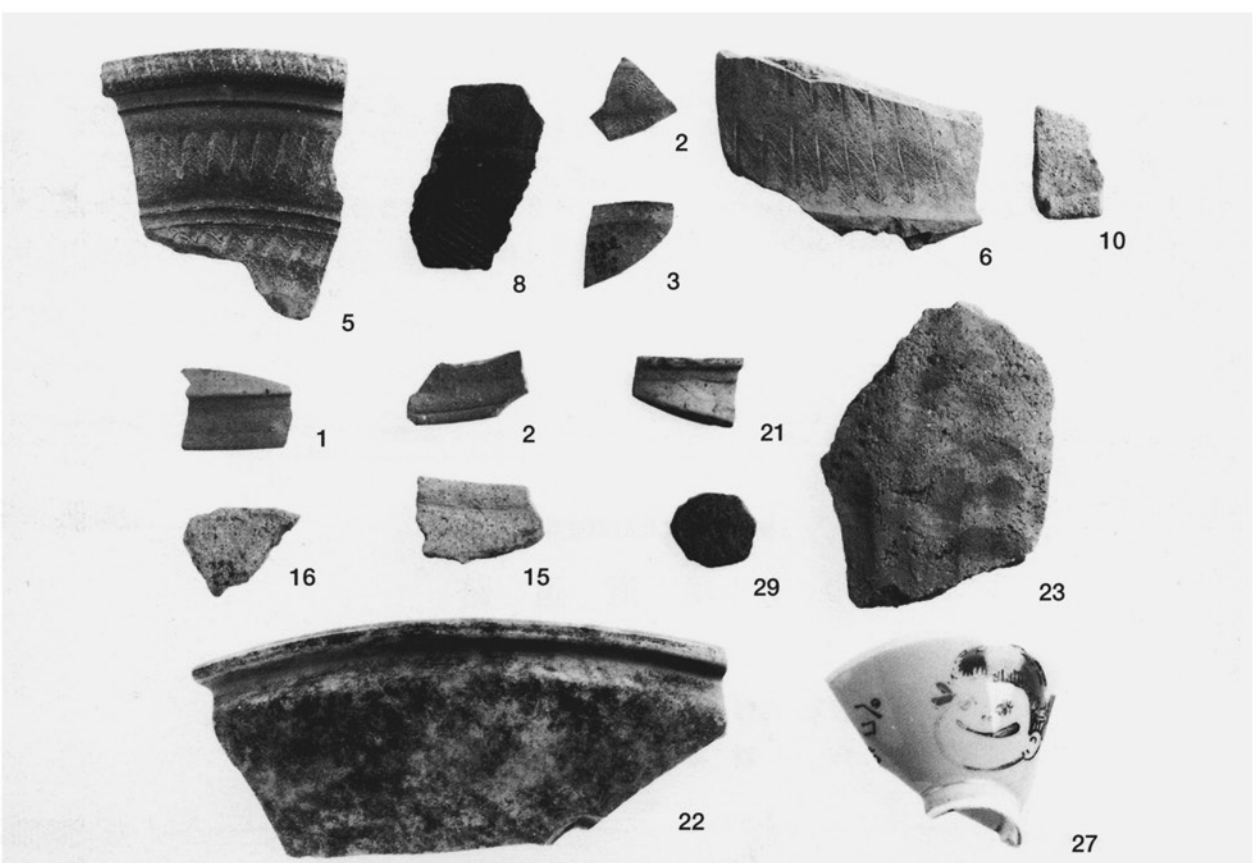
① 田辺昭三『須恵器大成』、角川書店、1981年。
② 谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告』、三重県文化財連盟、1970年。
③ 大川勝宏『小野江甚目遺跡・小野江甚目古墳群発掘調査報告書』、三重県埋蔵文化財センター、1999年。
④ 山本信夫「土器の分類」『大宰府条坊跡』Ⅱ、太宰府市教育委員会、1983年。
⑤ 伊藤裕偉「伊勢湾西岸部における中世港町の状況」『ふびと』50、三重大学歴史研究会、1998年。

PL.1

調査区東部全景（西から）

調査区西部全景（東から）

調査区南壁土層断面状況



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ありたき みち いせき
書名	有滝道遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	219
編著者名	伊藤裕偉　小林俊之
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596（52）1732
発行年月日	2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ありたきみちいせき 有滝道遺跡	いせしむらまつちょう 伊勢市村松町 あざありたきみち 字有滝道・ とうじがいと 藤治垣内	24203	146	34度 32分 20秒	136度 41分 45秒	20000612～ 20000714	550	県道（主要地方道）伊勢松阪線県単道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
有滝道遺跡	集落跡	古墳前期 古墳後期 近世	溝	台付甕 須恵器（杯・器台） 土師器・陶器	周辺に古墳群？

平成13(2001)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告219
有滝道遺跡
2001年3月
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　東海印刷株式会社